昭和六十年九月十日　第一刷発行　　定価　千二百円

ニューヨークの次郎長

著者　篠原有司男
発行者　野間惟道
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番二一号
電話東京(〇三)九四五一一一一(大代表)
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© Ushio Shinohara 1985 Printed in Japan

ISBN4-06-201991-4 (0)　(文二)

宥司男

ユーヨークの次郎長

講談社

目　次

ニューヨークの次郎長

石松、お前は後から来い……7
高下駄の久七……15
ロフトの大家はマフィヤであった……28
黒髪の踊り娘……42
次郎長一家売出す……55

チャイナタウンの石松……82
コニーアイランド作戦……97
地下鉄で大騒ぎ……109
夏草や、悪ガキたちの夢のあと……127
増川の仙右衛門……142
たこ目、失恋す……163
大前田の栄五郎親分……185
苺ちゃん、危機一髪……196
大迫力の三人展……213
美術渡世人紐育街道を行く　太田克彦……237

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

●装画・口絵・本文イラストレーション・篠原有司男●写真・瀧上恵二●装丁・スタジオ・ギブ

ニューヨークの次郎長

石松、お前は後から来い

「親分、もう日本は駄目だ！」
「そう早まるな」
「こうなったらアメリカにでも長い草鞋を履きましょう、この清水港、いやこの銀座、新宿界隈にあっしらのねぐらはありやせん、関八州取締役特別探索班次郎長一家係に、こう追かけ廻されたんじゃあ、いっそ太平洋の向う岸、地球を半廻りしたアメリカ大陸、ニューヨークにでも落ち行きましょうぜ」
「それもそうだなあ、やることなすこと全部裏目に出やがる、ところで石、お前旅費はあるのか」
「げんこつだけで」
「俺は来週立とうと思う、すぐ追って来い、奉加帳こさえて泣きつきゃあ親類縁者だ、友人だ、何とかなるぜ、アメリカに行くんだ、下手したら一生いきて会えるかわかったもんじゃねえと泣きつけ、五円ぐらい貰えるだろう」
「とにかくやってみやす」

青山五丁目の角から西方に富士山のシルエットがくっきり浮ぶ、道に迷うことはねえ、まっすぐ貫けば千駄ケ谷の駅だ、二人はぶらぶらと下りて行った。月星ゴムのネオンの上に本物の月があがり情けない二人の背中を照しているではないか——。

成田空港に現れた次郎長は、すっかり旅支度が出来上っていた。すなわち、白地の単衣ものに小倉の帯、手綱染の上三尺、草鞋履き、紅い笠を被り、緑色の振り分け荷物の中は、着替え、竹光だが道中差を一本腰にぶち込んでいるではないか。

「親分、一体この格好は」

さすがの石松もびっくり。

「よく聞け石、アメリカは物質文明の国、食物、着る物、何でも街中に溢れているんだ、ハリウッド映画を見ろ、真昼間からプールで戯れ、ロックをくちずさみながら芝生でのんびり昼飯を喰ってる奴ばかりだ、俺様はあくまで日本人の魂を失いたくねえ、それでこういう姿で行ってやる、して石、金は集まったか？」

「へえ、片道の飛行機代だけは何とか」

「げんこつで、それだけの金が集まればオンの字じゃあねえか、向うに着けばしめたもの、あとは俺様にまかしときな、それにしてもずいぶんとでけえ奉加帳を作ったもんだなあ」

次郎長は石松の抱えている一米四方もあろう奉加帳をひったくるとページをめくってびっくり

した。

「何だいこの名前は」

奉加帳に書かれた第一番目は、

田中角栄　五千万円
中曽根康弘　三千万円
王貞治　一千万円
長島茂雄　一千万円
若乃花　五百万円
黒柳徹子　三百万円
美空ひばり　百万円

「へえ、最初は景気づけで、八、九番目あたりから本当に金を頂いたかたがたと云うわけでして」

「まあいいや、とにかく何が何でもニューヨークにたどり着くんだぞ」

次郎長をアメリカに呼んだ、ロックフェラー七世奨学金とは、日本政府の、文化庁派遣の優等生タイプを基準に選んだ美術留学生とは逆に、実験的前衛アート志向を持ち続けている自称芸術家な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ら、多少酒癖が悪かろうとも、どしどし抜擢、アメリカに呼んでくれるので有名、もっとも新宿あたりのモツ焼屋で乱暴者であっても、ニューヨークのそれとは桁違いで、ポケットに、ナイフ、ピストルを隠し持ち飲み過ぎ暴れる奴を見るのは毎度のこと、そいつらを取締り、バーから叩き出すのも、酒を注ぐ間の、バーテンのもう一つの役目で、カウンターの下から何時でもショットガンが顔を出す、酒癖が喧嘩を生み、殴られて顔の形の変ったやつ、それでもどてっ腹にショットガンの一発を喰うよりはましかも、てめえの友人の絡みに、ごうを煮し、外に連れ出し、殴り倒してから担いで帰るなど朝飯前のニューヨーク。

「しかし、俺は何で、そんな恐しいニューヨークに絵の修業に行く気になったんだろう、観光会社の宣伝文句か、ハリウッド映画の見過ぎだな、こりゃあ」

次郎長が餓鬼の頃、B二九と呼ぶアメちゃんの爆撃機が毎日、東京に爆弾をばら撒いていた。

東京山の手のお屋敷町のど真中の長屋育ちの次郎長たちにとって、ふだん絶対に、立ち入ることはおろか、覗くのもやっとの神秘的大金持たちの大邸宅の黒壁が、非常時、空襲、防火のためと容赦なく、ばたばたと剝ぎ取られ、バラの花壇に囲まれた池や、美しいポーズの西洋彫刻、アーチなどがむき出しにされた中を、手に手に棒切れ持って、この宝島のような庭を、冒険ダン吉よろしく探検しまくった、疎開で無人の家のステンドグラスに投石し、からの鳥籠、洋酒の空ビンが餓鬼どもの略奪物になった。

餓鬼は皆、裏庭や通りに無数に掘り作られた防空壕が大好き、非常食のカンパン、スルメ、自家

JAL

製の砂糖の入らないお菓子の貯えが在り、ウーウーと敵機来襲のサイレンが鳴りひびけば、深夜だろうが、叩き起され、それっと防空壕に跳び込む、マッチ一本の明りでも、敵機から発見されれば忽ち爆弾の雨で皆殺しだぞと驚かされているから、手探り、月明りで非常食なるものをパクつく楽しみがある、翌朝、被爆地の焼跡に出向き、高射砲弾のシャープな破片や、不発弾を見つけ大騒ぎ、この幼児体験が、彼等を後日、廃品クズ屋式彫刻作りに駆らせたわけ。

幼児体験とは恐しいもので、長じても、ふだんは、天下国家を論じ、口を衝いて出るのは東西の大文豪、哲学者の名前ばかり、人類の未来を案じたと思うと、酒は朝から飲みほうだい、新宿、銀座までの車賃さえなく、工面し、無数にある芸術の発表場、画廊なるもののオープニングに顔を出し、仲間の元気を確認、何かにかこつけては、乾杯音頭で飲みまくり、寝酒が朝酒につながり、深夜に押掛けた人様の家から帰りの車賃までせびり、銭湯の一番湯につかり、又はスポーツサウナで体調を整えると、又又夕刻から始まる他人画家のオープニングに顔を出す始末、思考はいつも同じサイクルで、どうどう巡りばかり、すなわち、世間をアッと云わせる大傑作を次次と制作発表、世界中の美術館に購入され、受取った大金で又又大パーティー、一層人気上昇、人人から不世出の天才とうたわれ、老いて、みずからの名で個人美術館を建築、全作品を後世の若者に残し死ぬと云う、馬鹿馬鹿しい夢物語が、酒を一杯あおる事毎、現実に一歩一歩近づいて行く錯覚に陥り、実際は一刻一刻年老いて行き、夢物語の虹に目がくらみめまいがしているだけの朦朧状態の体を、その虹のかなたに向ってすっ飛ぶ飛行機に託しているのだった。

「ミスター次郎長、食事ですよ」
　ままごとよろしく奇麗に並んだ機内食、ピカピカの椅子、テーブル、天井に囲まれ、窓から夕焼けだか朝焼けだか、オレンジ色が目に染みてしかたがない。前の三人掛けの席に陣取る五人のインド人の家族には、やはり三人分しかディナーが配られなかった。育ち盛りのあぶれた二人が、くるっと後を向き、大きな目を見張って、めずらしそうに次郎長を眺めていた。
「お食べなせえ、あっしは飲んべえでして」
　食事が配られる度に全部子供たちに渡してしまい、ひたすらジャック・ダニエルの小びん空にして積みあげる作業を繰り返すうち、いつのまにか、空びんでマンハッタンが机一杯に出来上っていた。
「わあー、こいつは凄えや、こうして見ると俺は、やはり何処に居ても廃品彫刻家だあー」
　ところで出迎えは来てるんだろうなあ、先に行った子分共も、着いたばかりの頃だと、金髪がどうの、ステーキが旨いのと景気のいい手紙も来てたが、二、三ヵ月で忽ち音信不通、今じゃあ生きてんのかのたれ死んじまったのか。
　ケネディ空港のカウンターに近づいて来た次郎長の異様な格好を見た移民局の検査官の一人が、揉手で嬉しそうに、
「やつは俺にまかせろ、クロサワの侍映画なら全部、七人の侍は十回、座頭市なら二十回見てるんだ、よし、まずちょんまげだ、この中に手裏剣なんか隠していないだろうな、振分け荷物に風呂

敷、大小何でも包める便利な布切れだ、ふんどしには触りたくない、草鞋はまずい、街はガラスの破片で一杯だ、刀、どうせ竹光だろう、こんな長いカミソリを振廻されたんではたまらねえからな、留学生だな、ビザは一年間やる、それ以上アメリカに潜ったら、逮捕して強制送還だ、OK！」

マンハッタン二十三丁目とブロードウエイの角にある、チェルシーハウスには、ハリウッドの夢のカケラも無かった。アップタウンとダウンタウンの盛り場に挟まれ、もう一つ活気の出ないこの辺りは、道路に紙くずが吹き舞い、四月のイースターパレード祭にちょっと間のある、天気のはっきりしない今頃で、百年以上たつ汚れ切ったレンガ壁、開けたことのない窓、さびついた非常階段、見回しても、一体、人が住み商売している形跡の無いビル群、ばかでかい石を積みあげ、出来たてはさぞかしと思われる、十階以上もある高層ビルが、唖の巨象の如く在る。

ここでは風が掃除夫だ、乾き切ったゴミたちは、今日はここ、昨日はあちらのビルの前と風任せに舞い回っているだけ。台風でも来れば、とことん奇麗に洗い流してくれるだろうに。

チェルシーハウスは全くひどい、がたびしのドアー、あかのこびり付いたバスタブ、貧困、学習英語の全く通じないボーイたち、ここには本当のアメリカ人は居ない。これが次郎長の最初にたどりついたニューヨークだ。

窓からエンパイアビルが見え、何とゴリラがしがみついているではないか。

「何だいありゃあ！」

草鞋のまま風呂につかっていた次郎長が、鶴吉に尋ねた。
「ビニール製の人形いや猿形ですよ、馬鹿でかい、この街も最近、めずらしいことが多くてねえ、例えばマシンガンでオカマのバーになぐり込んで見たり、ビルが突然崩れ、住人が数十人下敷になったりで」
「ところで鶴吉、お前何年になる」
「二十年以上になりやす、あっしは、絵は描いちゃあいません、もう、ただのニューヨークの便利屋みたいなもんで、親分、解らねえことがあったら、何でもこの鶴吉に聞いてやっておくんなせえ」

高下駄の久七

「子分共はどうしている」
「めいめい仕事を持っているんで、まあそのうちに会えまっさあ、ところで石松さんは後から来るんでしょう、楽しみだなあ、早く会いてえ」
「しかし、聞くと見るとじゃあ大違いのニューヨークだなあ、汚ねえ街だ、この部屋なんざあ、シラミやダニに跳びつかれそうだ、日本だったらこんなホテルで金など取れねえぜ、一泊一万円、四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com